

# 進歩史観の隘路<sup>ゆきづまり</sup>・不条理な苦痛の軽減<sup>ピープル</sup>・人民の抵抗力の強さ

## ——市井三郎との 3 ラウンド

川本隆史 (思想の科学研究会・国際基督教大学／社会倫理学)

### はじめに

- ① **初読**：1971 年 10 月 29 日 (大学 2 年生／渋谷の夜間アルバイト先にて) → 学園祭 (11 月 13 日～14 日) に合わせて制作したサークル誌 (『アルファ オメガ』〈テーマ「歴史意識」〉／ガリ版刷り・本文 B5 判 28 ページ／編集：東大カトリック研究会／1971 年 11 月 12 日発行) 所収のエッセイ「ヨーロッパの歴史意識 その粗描——普遍・超越・イロニー」に、ちゃっかり引用。
- ② **再読**：2008 年 3 月 31 日 (帰省中の広島の家にて) → 難航していた論文「“不条理な苦痛”と「水俣の傷み」——市井三郎と最首悟の《衝突》・覚え書」(『岩波講座哲学 1』、2008 年 6 月所収 [配布資料]) を、どうにか書き上げる。
- ③ **再々読**：2019 年 11 月 3 日 (東京の自宅にて) ← 2019 年 3 月 4 日、前田丈志さんよりトークイベントの講師依頼メール届く。

### I 19 歳の若者と本書との出会い——1970 年代初頭、橋川文三を介して (?)

- 「一方、カントによる終末論の世俗化は、進歩史観を生み出していた。この項 [(5) 進歩史観のゆきづまり] については、市井三郎の近著『歴史の進歩とはなにか』(岩波新書) を参照されたい。彼は、まずキリスト教による終末観の導入が中世を経て、近代の「歴史に自然な進歩があるとする意識」の発生の源泉だとする。そして、チュルゴ、カント以後の進歩史観を「非情的自然主義型」と「浪漫的理想主義型」の二つの理念型 Idealtypus にわけ (第 4 章)。そして、シャトリエ、コンドルセ、マルクスの史観を検討しながら、ヨーロッパの進歩史観自体のゆきづまりを指摘している。即ち、終末論を世俗化したものの、次に歴史の「進歩」をはかる価値基準とは一体何なのかという大問題が生まれたのである。／たとえば、マルクスの進歩史観だと社会主義革命以前の「非情な」運命に追いやられることを余儀なくされる (まさに進歩史観の「法則」性によって) 多数の庶民のことは、倫理的にどう考えれば納得がゆくのかという問題である。この点については、マルクス主義は多くを語らなかった。「すべての救いを社会主義革命以後にたくしたにすぎなかった」(前掲書 P. 83) というべきだろう。／結局、進歩史観も歴史と実存との分裂を最高度に広げてしまったのである。実存主義が現実の歴史の場における絶望・挫折から実存へ、主観へと逃げこんだように、マルクス主義は歴史の「必然」、法則に従うことに甘んじようとする。終末論の世俗化とその反動は、人間をここまで追いこんでしまったのである。」(上掲サークル誌 9～10 ページ)

\*このあと (?), 駒場キャンパスのタテカンで本書の読書会が開かれることを知る (著者を招いての企画だったか)

どうかは不明)

【補足】 刊行後の書評ほか

- ① 『讀賣新聞』 1971年11月8日。  
\*「ただ、人間的・社会的事象についての論理的把握と直感的（感性的）把握の間にギャップを感じられるところがあるのが気になった。」
- ② 『朝日新聞』 1971年11月15日。  
\*「この部分 [=幕末畿内の「国訴」] の [著作] 全体へのはめこみは、いささかとまどうところである。」
- ③ 『図書新聞』 1971年11月27日（謝世輝=相模工大・文明論）。
- ④ 『サンデー毎日』 1971年12月12日号（深作光貞 [京都精華短大・文化人類学 / 『泥』 同人]）。
- ⑤ 『日本読書新聞』 1972年1月1日（神川正彦=神奈川大学・哲学）。  
\*P・M・シュル『機械と哲学』（岩波新書）と合わせてのレビュー。
- ⑥ 『週刊読書人』 1972年5月1日（花田圭介=北海道大学・哲学 [「科学論理学研究会」仲間]）。
- ⑦ 『思想の科学』 1972年5月号（魚津郁夫=熊本大学・哲学 [「思想の科学研究会」会員]）。
- ⑧ 杉山吉弘「『解説と評価』『歴史の進歩とはなにか』」、鶴見俊輔・花田圭介編『市民の論理学者・市井三郎』、思想の科学社、1991年所収。
- ⑨ 松岡信義「創造的苦痛をひき受ける主体形成の課題に向かって——市井三郎『歴史の進歩とはなにか』再読」、『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』43巻、1998年。

II 四半世紀後の再読——市井×最首「衝突」を検討する過程で（配布資料参照）

【前史】 1996年3月24日、丸山徳次さん（龍谷大学 / 倫理学）より『水俣の啓示——不知火海総合調査報告』（筑摩書房 1983年）における両者の論争を教えられる→翌日、近くの区立図書館所収の同書を借り出す（1996年9月11日、東武東上線・下赤塚の古書店で二冊セットを発見・購入）→1996年4月28日、『思想の科学』創刊50周年記念講演会（日本青年館 / 全体テーマ「私の哲学」）における報告（「『思想の科学』の哲学は有効性を取戻しえたか——社会倫理の観点から」）でこの論争に言及、市井の「失敗から学ぶ」ことを示唆（直後に鶴見俊輔さんよりコメントを頂戴する）→小論「老いと死の倫理——ある小児科医の思索を手がかりに」（河合隼雄・鶴見俊輔編『倫理と道徳』〈現代日本文化論9〉岩波書店、1997年5月所収）の「おわりに」で前年の記念講演会での報告を振り返る。

【構成】 はじめに——哲学と現場？ / 1 水俣病は新たなる「人間淘汰」か——「不知火海総合学術調査団」における激突 / 2 「キー・パーソン」と「不条理な苦痛」——哲学者・市井三郎の冒険 / 3 「直接性」と「学問の壁」——問学者・最首悟の探究 / おわりに——連帯を求めて孤立を恐れず？

【ささやかな反響】 鶴見俊輔\*、小林傳司、大江一道、堀孝彦、池田光穂、色川大吉、峯陽一氏らよりの私信に加えて、ウェブ上で（未知の人物による）次のようなコメントが加えられていたことが判明している。

私は、最首の市井三郎批判のことを最近になって初めて川本隆史の論文で知った。（岩波講座「哲学」01 「不条理な苦痛と『水俣の傷み』」）〔中略〕私は、なにも最首の尻馬に乗ってもう亡くなってしまった市井三郎を糾弾しよ

うなどとは思わない。ただ、市井三郎のこの文章に見られるものの見方は、実はよく耳にする意見ではある。いわゆる良心的な人、戦争に反対で、もちろん水俣病を初めとした企業犯罪にも十分に批判的である人も陥りがちな落とし穴をよく示している。

つまり、人間の尊厳というときの「人間」の定義に、いつの間にか「健全な人」という前提が滑り込んでいるのである。考えてみればおかしな話だ。家族が懸命に愛情を注いでいる重症水俣病患者もいれば、虐待され、時に不条理に「健全の」母や父に殺される「健全な」子供もいるのである。聡明な哲学者で、歴史を大きく俯瞰するにすぐれた市井三郎でさえ、そうなのであるから、もっとひどい渡部昇一の類の障害者差別は数知れない。

母ならば自然に子供に愛情がわいて出ると信じているような言説が、あたかも道義的であるかのように蔓延している今の日本の社会を、私は認めない。愛は自然にまかせて内側から生まれてくるものではない。愛もまた、意識して、努力して作り出すものである。(ブログ「紙魚の目」<http://diary.jp.aol.com/syxtajhpk8rb/81.html> [リンク切れ])

池田光徳さん(大阪大学コミュニケーションデザインセンター/医療人類学)が「国民国家概念がさほど有効ではなくなった今日において、私たちは“国”際保健医療協力の持続可能性に何を期待することができるのか：その学際研究の可能性についての諸考察」というエッセイを自身のホームページに公表している。

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/060307final.html>。

彼によれば、水俣調査団の活動は「日本の学界に批判的かつ代替的な議論の可能性に対してさまざまな種を蒔いたと評価することができる」。そして最首の市井批判は「フィールドワークの成果がつねに社会的価値の産物である事実を明らかにし、またあらゆる社会調査は研究における中立的な価値判断の虚構性を問題化することを指摘し」たものにほかならない。なお拙論に関する池田さんの感想(私信と同文)は、以下のブログ(日記)で読むことができる——<http://d.hatena.ne.jp/mitubishi/20080618>。

#### 【鬼頭秀一と最首悟からの《応答》】

- ① 鬼頭秀一「環境破壊をめぐる言説の現場から」(『岩波講座 哲学 08』《生命/環境の哲学》、岩波書店、2009年)——とくに第三節「市井-最首論争再考——「学問」と「政治」の「現場」の視点から」  
「市井は、自らの科学哲学者としての思いに基づき、ある意味で、学問的な誠実さを貫くことで、政治的には「誤った」のである。〔……〕最首の批判は、政治的には正しいが、学問的には、一種のルール違反であったと言ってよい。〔……〕市井の学問的誠実性に対して、あえて一種のルール違反までも犯しても、市井の言説の社会的な意味を暴かざるをえなかった最首の思いは、この不知火海総合学術調査団の可能性と限界を端的に示しているのであった。私たちは、ここから始めなければならない。学問における「現場」とは何かという問いは、ここから始まるのである。」(160-161 ページ)
- ② 高草木光一編『連続講義「いのち」から現代世界を考える』(岩波書店、2009年)での最首発言(同書巻末の島藺進、山口研一郎、高草木との座談会も参照のこと)。  
「市井三郎さんは高名な哲学者ですが、水俣の悲惨さには耐えられない、そういう悲惨さをもたらしたものを憎むという言い方で、実は悲惨な生き方をしている人々を追い出している。そういうやり方に、私が嘔み付いたということになっているのですが、市井さんの否定は肯定に基づいている。つまり、人間とはこういうものだという肯定です。その人間像に合わせて現に生きている胎児性水俣病患者を視野から遠ざけようとする。一般的にいうと、否定は肯定あってこそという立場に立っても、何を、そしてそれをどのように肯定するのかは、難しい。」(226 ページ)

## 【関連文献の補足】

小松原織香「「公害問題」から「環境問題」へ——水俣地域における「不知火海総合学術調査団」の活動を手掛かりに」、『現代生命哲学研究』7号、早稲田大学人間総合研究センター、2018年3月。

(<http://www.philosophyoflife.org/jp/seimei201804.pdf>)

森下直紀「水俣病史における「不知火海総合学術調査団」の位置——人文・社会科学研究の「共同行為」について」、『生存学研究センター報告』14巻、立命館大学生存学研究センター、2010年11月。

(<http://r-cube.ritsumei.ac.jp/repo/repository/rcube/2343/>)

●『図書』臨時増刊＝岩波新書創刊70年記念《私のすすめる岩波新書》(2008年11月)のアンケートに本書を挙げる

「岩波新書との馴れ初めは、高校三年「現代国語」の授業で丸山真男の『日本の思想』を読まされた頃に遡る。大学一年(一九七〇年)秋の南島旅行には、大江健三郎の『沖縄ノート』を携えた。そして翌年の冬、歴史と哲学への関心を燃やし始めていた私の前に現われたのが、市井の作品である。タイトルに惹かれて刊行直後に購入し、十日足らずで読破。法学部より文学部に転じ、カントから社会倫理学へと歩を進める途上、「不条理な、苦痛を減らさなければならない」という同書の提言を幾度も反芻した。色川大吉編『水俣の啓示』(筑摩書房、一九八三年)に残された最首悟との意見衝突をも含めて、市井の軌跡から学べるものは少なくない。」

## III 48年後の再々読——新たな発見のいくつか

① 第一章冒頭に引かれたアンナ・ルイズ・ストロング(Anna Louise Strong 1885-1970/米国ジャーナリスト、毛沢東と親交を結ぶ、6回目の中国訪問中に死去)の詩の出典。

●A・L・ストロング『人民公社は拡がり深まる』西園寺公一訳、岩波新書1960年2月の「訳者あとがき——アナ・ルイズの印象」(207ページ以下)——ストロングが74歳になった1959年のクリスマスイブ・パーティ席上で「30年前につくった」自作(敗残の人たち)を吟じた。

山をおりてくると／山道ぞいに／荒れ古びた小屋が多い——／わな猟師たちの小屋、／きこりたちの小屋、／やま師たちの小屋、／それから／誰も知らない夢を追って／西部へ、西部へと幌馬車を駆り続けてきた／孤独な人たちの小屋。／東部で何があったのか／何が彼らを大平原のこなたに駆りたてたのか／誰も知るものはない。／はたして目的地へ行きついたのか／誰も知るものはない。／だが、／つぶれかけた、からっぽの小屋は〔以下末尾まで、本書1ページ以下に抜き書きされている〕

「それ〔ストロングの詩の深い意味〕は、近代市民社会なるものが、競争の原理によっているために必然的に敗残するものと勝利するものとにわかれていた、という認識をうたっているのではないか。[……] ストロング女子の若き日とはちがって、第二次大戦後のわれわれは、より多くのことをこの詩から連想できるような情報を、かなり鮮明にもっているはずである。／いうまでもなくそれは、アメリカ・インディアンたちの運命のことだ。」(本書3ページ)→西部劇映画「黄色いリボン」の分析→ベ平連主催の国際会議でのエピソード→「進歩の理念それじたいが、まさに懐疑にさらされているのが現代の特徴なのだ。」(10ページ)→「科学技術の「進歩」なるものは、人類みなごろしの可能性を現実のものとした。[……] 公害の問題は、究極兵器の問題を別にしても、人類みなごろしの可能性を示唆し

はじめているではないか。」(同)

② 「《おのおのの人間(ホモ・サピエンス)は、みずからの責任を問われる必要のないことからさまざまな苦痛——略して「不条理な苦痛」と呼ぶ——を負わされているが、その種の苦痛は減らさねばならない》という理念」(196 ページ)を提案するに先立って、「人間史の進歩なるもの」を判断する「倫理基準」を「人民の物質的福祉といったこと」から、「国家権力にたいする人民の側の、抵抗力の強さという尺度」へ移す(べき)ことを主張していた(109 ページ)→「人民の反権力闘争の歴史的諸事実」、たとえば「国訴」と呼ばれる幕府への訴訟闘争への注目(110 ページ以下)。

\* 「不条理な苦痛(の軽減)」という集計概念よりも、「人民の側の、抵抗力の強さ」という(質的?)尺度のほうが、今の私にはしっくり腑に落ちる。さらにこの「倫理基準」と本書の結びのメッセージ=「たえず自己否定の契機を活かしつつ、価値理念への接近がどこまでも目指される場合にのみ、人類史には救いの曙光がきざすのではなからうか」(216 ページ)とがどうつながるのかについても、再考の余地があるだろう。

③ 第七章で検討される「社会的パラドックス」のひとつ「多数決のパラドックス」に関して、村上泰亮の *Logic and Social Choice*, 1968 [原文と邦訳は『村上泰亮著作集1』、中央公論社、1997年に所収]を引き合いに出しているが、アマルティア・センが「リベラル・パラドックス」を提起した論考(「パレート派リベラルの不可能性」1970年および「自由・全員一致・権利」1976年[ともに『合理的な愚か者:経済学=倫理的探究』大庭健・川本隆史訳、勁草書房、1989年所収])と市井の分析とを突き合わせることにより、「不条理な苦痛を軽減するためには、みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身にひき受ける人間が不可欠なのである」(148 ページ)とする《英雄・達人の倫理》を《人並み・凡夫の倫理》へと転換する理路を探り当てていきたい。

さらに「我田引水・牽強付会」のそしりを恐れず付言するなら、「正義のパラドックス」の解決策としてジョン・ロールズの「正義の二原理」を読み解いてみたい(→清水幾太郎の『倫理学ノート』に関する鋭い論評を残した市井が、もしロールズの『正義論』を読んでいたら、どのようなコメントを残してくれたらうか)。

## おわりに——落穂拾いの的に

● 『歴史の進歩とはなにか』に学んだ人たち

① 法哲学者・若松良樹:「基礎法分野ガイダンス『歴史の進歩とはなにか』」(『別冊法学セミナー』148号=法学入門:現在を見る、法律という切り口、日本評論社、1997年4月)

「所詮、この世では善など存在しない」とうそぶいていた私に、本書は道徳的議論を行うことを放棄する必要がないことを示し、むしろ、日々目の当たりにしている悪にこそ目を向けるべきではないかという考えを教えてくれた。」(99 ページ)

\* 若松さんが師事した田中成明さんも『裁判をめぐる法と政治』(有斐閣、1979年)において、市井の「普遍的価値理念」の提唱にいち早く注目していた(同書369ページ注(2))。

② 児童精神科医・杉山登志郎:『発達障害の子どもたち』(講談社現代新書、2007年)

「すべての子どもにとって、健康なそだちに普遍的に必要なものは何かということを考えてみると、愛着者から与えられる肯定感と、自己自身が育む自尊感情の二つではないかと思う。[……] / 歴史学者、市井三郎の次の言葉

によって、この章を閉じたい。／「歴史の進歩とは、自らに責任のない問題で苦痛を受ける割合が減ることによって実現される」／発達障害とは、明らかに自らの責任で子どもたちが受けたものではない。それをきちんとサポートするシステムこそ、歴史の進歩である。」(同書 212～213 ページ)

③ 音楽家・滝沢卓：「不条理な痛み、刻む調べ——射水の音楽家・滝沢さん、CD「イタイイタイ」発表へ」(『朝日新聞』2009年3月9日朝刊、「富山全県」面)

「高岡市出身の滝沢さんは、成蹊大学工学部に在学中、哲学者の市井三郎らに会い[……]市井が唱えた、貧困や差別といった現代社会の『不条理な苦痛』を減らす」という歴史観が、作品を生むきっかけの一つになったという。」

④ 倫理学者・鷺田清一：「折々のことば」(『朝日新聞』2015年7月2日)

「たまたまこの国、この民族の一員として生まれたことで強られる苦痛。この性、このような体つきに生まれたことで受ける苦痛。本人のあずかり知らぬ属性によって受けるこれらの不条理な苦痛を取り除くことが、「自由」や「平等」といった理念よりもっと根本的な倫理的要請だと、哲学者はいう。「歴史の進歩とはなにか」から。」

●吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』(1937年)がナポレオンの半生を手がかりに考えさせようとした「世の中の正しい進歩」(岩波文庫版 191 ページ)や「英雄とか偉人とかいわれている人々の中で、本当に尊敬が出来るのは、人類の進歩に役立った人だけだ。そして、彼らの非凡な事業のうち、真に値打のあるものは、ただこの流れに沿って行われた事業だけだ。」(192 ページ)という訴えを、次の世代へと読み継いでいくこと。

●市井×最首「衝突」からは、①「現場性」という身構え(李静和『求めの政治学——言葉・這い舞う島』岩波書店、2004年、18～19 ページ)、②「脱集計化」というアプローチ(アマルティア・センおよび峯陽一)、③「出口のある学問」という方向性(鶴見和子)を、追究し続けたい。

「鶴見 ああいう[「人間淘汰」をめぐる]問題がどうして後まで残るかと言うと、不足があるからだと思うんです。不足があるからあの問題が最後まで残るとわたしは思ってる。」

色川 不足？

鶴見 足りないところがあるということなんです。[中略]それが市井論文に一番集中的にというか、わりにはつきり出てきちゃったのだとおもうんです。それは市井さん一人の問題ではないと、わたしは思っています。[中略]わたしは角田さん、石牟礼さんの文章[『水俣の啓示』下巻に収められた、角田豊子(当時、玉名高校教諭)「天草の女——<sup>あら</sup>鼠口の一老女の話」および石牟礼道子「乳の潮」]にすごく感動しました。[中略]やはりどんでんがえしがあるかないかということが、角田さん、石牟礼さんのようなすぐれた作品と、わたしたちのように作品になっていないものとのちがいだと思います。学者が書いたものの不足が市井さんの論文の不足として非常にはっきり出てきている。だからわたしは同罪です。

それはなぜかという、どんでんがえしを理論的にちゃんと出していないということなんです。あれだけの苦しみをした人たちが、なんかもう本当にこの本を読んでいると出口なしになっちゃう。わたしは石牟礼さんのところを読んで初めて救われました。[中略]

これは学問の課題だと思うんですけど、水俣の問題というのは、やはり近代工業文明の最も極限的な害悪を身にひきうけた人たちの問題です。そうすると、わたしたちが使っている学問の分析の道具というものは、近代工業文明の枠の中の学問の用語です。その方法で分析していくと、出口なしという推論が最も客観的、科学的であるということになるわけです。そういう方法でやっている限りでは、どんでんがえしはありえないということなんです。

ですからわれわれの力量不足を市井論文がつぶさにあらわしたとわたしは思います。

それに対する反論は、出口のある学問の方法をわたしたちが水俣調査の中から出していくことにしかないと思っています。」(『水俣の啓示』下巻、500～501 ページ)

\* 「市井さんの『社会生物学』紹介の中にあつた「劣者排除の人間淘汰」説の水俣への適用や、その批判の不徹底さ、昏迷は、最首さんの指摘の通り、おのれの「無意識的領域」にあつた差別観の表出であつたと思う。そのことは、今になってはつきりと分る。私自身の「不明」でもあつたのだから。だが、当時、鶴見さんは自分の問題でもあるとして引受けておられた。」(色川大吉「鶴見和子と水俣——「賑わい神さん」、河合隼雄ほか『鶴見和子の世界』藤原書店、1999年、135 ページ)

◎藤田信勝『学者の森』上(毎日新聞社、1963年)の「走る哲学者」(35～40 ページ)は、「アプレ哲学者」市井の当時の言動を活写している(「市井三郎サイト」に寄せられた竹内通夫さん〔1939年生まれ／幼児教育論〕の好論「市井三郎先生の講義と市井歴史哲学」から教わつた)。

(かわもと・たかし)